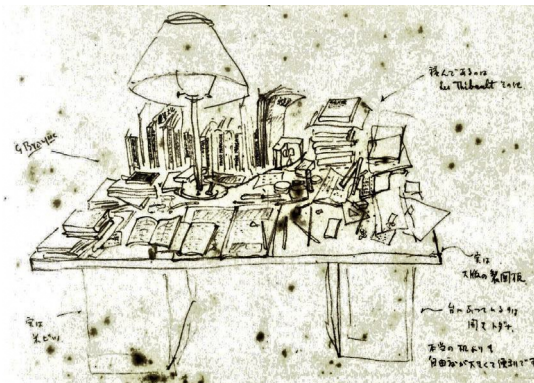


# 鈴木信太郎記念館だより

## 第8号

### 鈴木家の住まい方 —「おへヤ拝見」—

何となく机を描いていたら、だん(だん)大ゲサになって  
来ました。今日は何も書くことがないし、僅か10分だけ書く  
つもりだったのだが、大分長くなってしまったのでもうやめます。  
“おへヤ拝見”という様なものになりました。



鈴木信太郎の長男成文が建築学科の学生時代、後の妻に宛てた私信(1953[昭和28]年5月5日付)には上記のメモに加え勉強机と部屋の間取りが描かれています。戸棚と米びつに製図板を

乗せた勉強机は「自由度が大きくて便利」で、机の上には三角定規など製図用具のほか、フランス文学作品や画集も並んでいます。

他方、間取りのスケッチは移築当初の座敷棟の姿を映したもので、現在の間取りと異なっています(図2)。住まいは創建から大まかに8回姿を変えており、その間にも細かな増改築を行いました。1948(昭和23)年に座敷棟を移築し3棟一体型住居となった鈴木家<sup>1</sup>。それは変遷の6期目(1948~1956)に該当します。当時、書齋で信太郎・花子夫妻が寝起きし、弟たちは書齋棟の内蔵<sup>うちぐら</sup>2階を使用、さらに女中が1名再来し総勢6人で暮らしました。スケッチによれば、成文は座敷棟8畳間を勉強部屋として使っていたようです。その後まもなくして座敷棟の増改築を行い、台所が増築され現存の広さになりました(図3)<sup>2</sup>。

さて、当館の書齋棟北側廊下・建築図面の展示コーナーでは、建物の変遷を示す資料を展示しています。時代や生活環境の変化に対応しながら住まいと生活を維持した鈴木家の暮らしを辿り、“おへヤ”を覗いてみてはいかがでしょうか。(森 泰子)

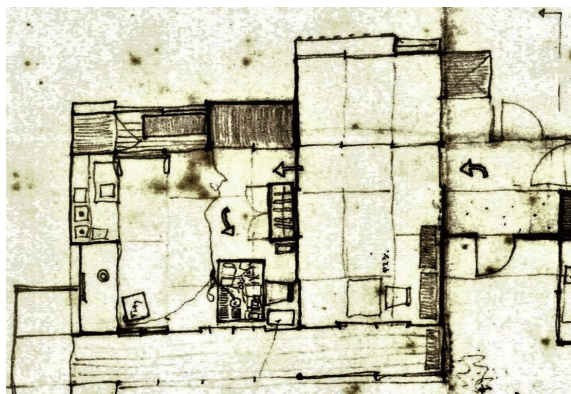


図2 座敷棟のスケッチ(1953年5月5日)

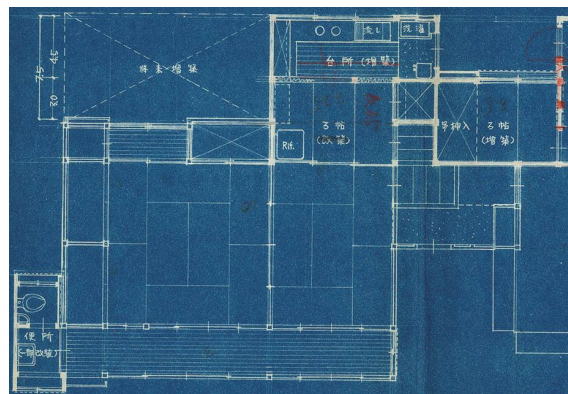


図3 座敷棟増改築時(1953年6月3日)の青図抜粋

【註】1. 1948年(昭和23)年に埼玉県下吉妻(現春日部市)の鈴木本家から書院座敷を移築。この時、茶の間・ホール棟の間に内玄関を新設。  
2. 次の間の北側3畳間に台所2、隣に3畳の女中室を増築。茶の間・ホール棟の台所1を一部改造、さらに座敷の便所を洋式に取替え。

【資料】成文から妻貴美子への私信(1953年5月5日付)、当館蔵/図面「No.1 平面図B邸増改築」1/50、1953年6月3日、青焼・インク・紙、当館蔵

## 展示関連講演会

「信太郎の愛蔵書」コーナーでは、5月7日(日)まで、2022年に生誕180年を迎えたステファヌ・マラルメ(1842-1898)に関する展示を行っています。この展示にちなんだ講演会を以下の通り開催しました。

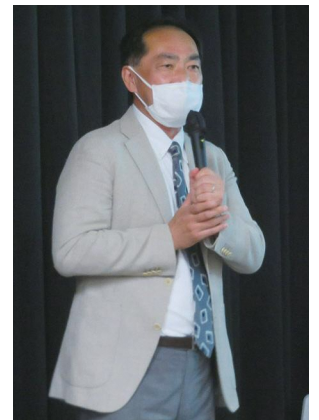
### I 講演会「1887年のマラルメ」

鈴木信太郎の愛蔵書の白眉であり、1887年に47部限定で刊行された詩人の生前唯一の総合詩集『ステファヌ・マラルメ詩集』を中心に、マラルメとその作品についてお話しいただきました。同詩集に収められた一篇「あらわれ(Apparition)」を目と耳とでじっくりと味わうことで、マラルメ詩の世界に一步踏み出すことができたような気がします。

[日 時] 2022年7月16日(土) 14:00~15:30

[講 師] 大出 敦 氏(慶應義塾大学教授)

[参加者] 16名 [会 場] 南大塚地域文化創造館



### II 講演会「マラルメと美術」

マラルメと深い友情で結ばれ、『大鴉』(1875年)や『半獣神の午後』(1876年)の挿画を手がけた画家エドゥアール・マネ(1832-1883)をはじめ、マラルメと美術とのかかわりについて、「マネとモダン・パリ」展(2010年、三菱一号館美術館)ほか、数多くの美術展を企画した高橋明也氏にお話しいただきました。「マラルメと同世代の芸術家のエピソードをたくさんご紹介いただいて、当時の芸術家たちの交流や影響の様子が、いきいきと感じられました。」とのお声をいただきました。

[日 時] 2023年2月4日(土) 14:00~15:30

[講 師] 高橋 明也氏(美術史家、東京都美術館館長)

[参加者] 30名 [会 場] 南大塚地域文化創造館



## 南大塚地域文化創造館文化カレッジ「フランス文学とフランス文化に親しむII」

(鈴木信太郎記念館・立教大学文学部文学科フランス文学専修共同企画)

フランス文学や文化の多様性について、文学をはじめさまざまな視点から立教大学文学部文学科フランス文学専修ほかに所属の先生方にお話しいただきました。「カリキュラムが多様な視点から構成されており、講義・見学などと相俟ってとても興味深く参加できました。自分の知らない作品を多数紹介していただき少しずつ読んでみようと思っています。」とのお声をいただきました。



[日 時] 2022年10月29日、11月5日、12日、19日、26日(全5回)/毎週土曜、14:00~15:30

[受講者] 33名 [会 場] 南大塚地域文化創造館、鈴木信太郎記念館(第3回)

[講師及び内容]

第1回: 澤田直氏(立教大学教授)「フランス文学の多様性」

第2回: 小倉和子氏(立教大学教授)「フランス語圏文学:カナダを中心に」

第3回: 鈴木信太郎記念館学芸担当「フランス文学者鈴木信太郎の生涯と鈴木信太郎記念館」

第4回: 関末玲氏(立教大学准教授)「マルグリット・デュラス:映画作品と文学作品」

第5回: 坂本浩也氏(立教大学教授)「マルセル・プルーストとその時代:19世紀末から第一次世界大戦まで」

(永嶋 里佳)

# 鈴木信太郎と食

## 「伸餅のうまかつた頃」

信太郎が戦前に発表した随筆「飽食放語」。ここでは、稀代の美食家として知られるブリア＝サヴァラン(1755-1826)の紹介を皮切りに古今東西の美食に関する持論が展開され、その締めくりに餅が登場します。

以上のやうに日本支那フランスと並べ立てて来たが、一體何が一番うまいか。答へは至極簡単だ。型や種類はいろいろあるが、巴里のパンがうまい。それよりもうまいのが日本の米。なほ一層うまいのが日本の餅だ。

神田佐久間町の米問屋に生まれ育ち、大学を卒業する頃まで同地に暮らした信太郎。上質の米を専門に取り扱う店は全国に取引があり、美味しい米や餅を日々口にできる環境に恵まれていました。信太郎の餅に対する愛情とこだわりは父・政次郎から受け継いだもので、随筆にも度々登場します。美味しい餅は、まずはその年に収穫された最良の糯米<sup>もちこめ</sup>を選ぶことから始まるといいます。

産地は昔ながらの武州越谷<sup>こしがや</sup>。一層正確に言へば越谷の新兵衛沼の附近で穫れる新兵衛太郎糯と三次郎糯とのうち、新兵衛太郎糯が世界第一である。<sup>1</sup>

次は搗き方。父親の時代は「出来る限り水を少なくして」、ダマ(米粒の搗き残された粒)が残らないように二度搗きしていたそうです。昭和に入ると機械化され、ダマはなくなったものの、糯米が極上でないと「腰の弱い、だらしない餅」になりやすいとも述べています。こうして搗き上がった伸餅<sup>のしもち</sup>は、「肌は羽二重の如く、腰は強く、よく引いて間延びせず、谷崎潤一郎の小説のやうだ。」と絶賛しています。

信太郎は「年の暮の餅と寒餅とのため、年々二三俵ずつ最上の糯米を選択させて、伸餅にして、親友たちに賞味して貰った。」<sup>2</sup>といっています。フランス文学仲間<sup>ゆたか</sup>の辰野隆、山田珠樹、豊島與志雄、岸田國士等、その顔ぶれは多彩ですが、なかでも、この餅をこよなく愛していたのが、詩人・英文学者の日夏耿之介<sup>ひなつこうのすけ</sup>(1890-1971)です。日夏から届いた礼状からは、この餅に歓喜する様子が活き活きと伝わってきます。信州生まれの家族一同、特に旧家育ちの母親は「むかしを偲び一入喜んで頂戴」したこと(1934年1月3日付)、母と妹を亡くし、さらに病のため大学での職も失い「明月のパンには脅かされる身ノ上」で、「味覚的にうれしいのみか、米味噌醤油のやうに実質的にも太だ毳ばしく頂戴した次第」(1935年末[推定])、さらに自身の句集の序でも「餅を喜び酒を嗜む也」と綴ったといっています(1936年末[推定]/図)<sup>3</sup>。

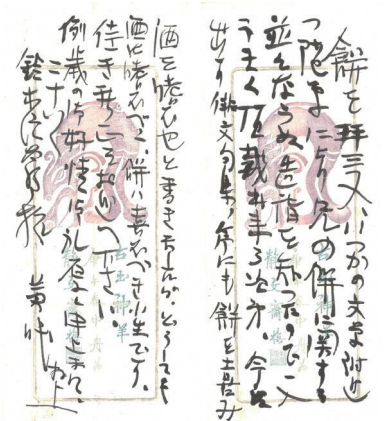


図 日夏耿之介から信太郎宛書簡(年代不明/1936年末[推定])、当館蔵

こうした餅が入手できたのは戦前までで、信太郎は戦後、「もう昔を思ひ出すだけで、うまい伸餅など手に入らない。」ことを嘆きます。米は戦時中に価格統制され、品質にこだわって生産することが難しくなったためだといえます。

しかし信太郎が愛した越谷の餅<sup>3</sup>は、消えてしまったわけではありません。平成に入り自治体が品種保存に乗り出し、生産者たちが後世に残そうと重ねた努力によって復活を遂げました。戦前と同じ味かは確認のしようがありませんが、信太郎が「ブリア・サヴァランの所謂超絶的味覚」と評した餅を食してみたいものです。(永嶋 里佳)

【註】1「新兵衛沼」は現在の草加市新栄町にある新栄団地(江戸時代には大きな沼で明治20年頃の地図でも沼)であろう。また、「新兵衛太郎」という糯米はおそらく信太郎の記憶違いで(自身でも「うろ覚えの昔話」と述べる)、当地の名主・会田太郎兵衛が慶長年間に作出した「太郎兵衛糯」のことであろう。この糯米は明治から昭和初期にかけて隆盛を極め宮内省御用も勤めた。(越谷市教育委員会)

2 日夏耿之介『溝五位句集』(野田書房、昭和12年1月)の序は、「餅を喜び且酒を怡ぶ也。」という書き出しで始まる。

3 註1で述べた「太郎兵衛糯」。

【参考文献】越谷市HP「太郎兵衛もち」/越谷市郷土研究会「越谷特産米<太郎兵衛糯>」1993年8月/鈴木信太郎「味」、「飽食放語」、「伸餅の思出」、「伸餅のうまかつた頃」、すべて『鈴木信太郎全集』第5巻(大修館書店、1973年)所収

## 記念館からのお知らせ

### 区制90周年企画展会期延長のお知らせ

区制90周年 鈴木信太郎記念館企画展「鈴木家の暮らし×としま90年」は好評につき、会期を2023年5月28日(日)まで延長します。みなさまのご来館をお待ちしております。

[会 期] 2022年10月1日(土)～2023年5月28日(日)

[休館日] 月曜日(祝日が重なる場合は翌日も)、第3日曜日、祝日(2023年5月3日・4日・5日は開館)、  
年末年始、臨時休館日(2023年5月9日・10日・11日)

### ギャラリートーク

毎月第3土曜日の午後2時より約40分間、鈴木信太郎記念館のみどころをはじめ、フランス文学や建物と暮らしについて当館学芸員が分かりやすく解説します。事前申し込みは不要ですので、お気軽にご参加ください。

[4月～6月の実施予定] 2023年4月15日(土)、5月20日(土)、6月17日(土)

### メールマガジン「鈴木信太郎記念館ニュース」のご案内

当館の最新情報をお伝えするメールマガジン「鈴木信太郎記念館ニュース」を配信しています。講演会やイベント情報、展示のご案内や休館情報などを不定期配信でお知らせしています。配信をご希望の方は、当館ホームページよりご登録ください。



5月 団体見学の様子



7月 玄関ホールに七夕かざりを設置

#### 鈴木信太郎記念館だより 第8号

発行日 2023年3月28日

発行 豊島区

編集 豊島区立鈴木信太郎記念館

〒170-0013 東京都豊島区東池袋5-52-3

TEL: 03-5950-1737

<https://www.city.toshima.lg.jp/129/bunka/bunka/shiryokan/suzuki/suzuki.html>



としま区制90周年

SDGs未来都市としま



豊島区は持続可能な開発目標(SDGs)を支援しています。